AACK 京都大学学士山岳会 No.77

Newsletter

June 2016

http://www.aack.or.jp

目　次

マナスル登山計画の端緒：
今西錦司の登山４段階説の視点から
松沢哲郎 1

「ザ・マナスルデー」の報告
榊原雅晴 4

妙高笹ヶ峰音楽祭
原　剛 7

図書紹介
私のシュプールⅠ　ハガスキーの歴史と私の登山（芳賀孝郎著）
平井一正 10

2016 年 AACK 関東会・笹ヶ峰会　合同新年会
山岸久雄 11

第 36 回雲南懇話会（2016 年 3 月 19 日開催）講演概要
山岸久雄、安仁屋政武 12

AACK Newsletter No.76 掲載の記事、「ラダック山脈、ゴンマ峰他に初登頂（2012）」栗本俊和著について
編集人　横山宏太郎.....13

AACK Newsletter No.76「ラダック山脈、ゴンマ峰他に初登頂 (2012)」―2012 年に行なった登山の経緯と掲載文（文言）の訂正について―
栗本俊和 15

会員動向 16

編集後記 18

マナスル登山計画の端緒：
今西錦司の登山４段階説の視点から

松沢哲郎

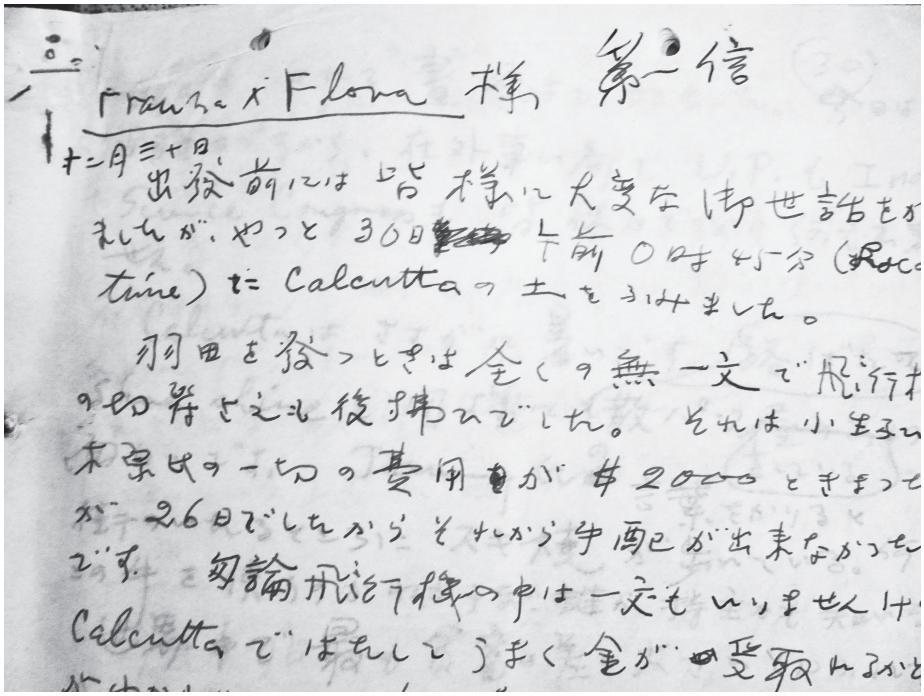
本年はマナスル初登頂から 60 周年になる。京大学士山岳会員の今西寿雄さん（1914-1995）とシェルパのギャルツェン・ノルブさんが 1956 年 5 月 9 日に初登頂した。そもそもマナスルの登山計画は、今西錦司さん（1902-1992）や西堀栄三郎さん（1903-1987）ら、京大に集う岳人の手で練られたものである。この機会にマナスルと京大の歴史をひもとき、その意義をあらためて確認したい。

5 月 8 日に、マナスル初登頂 60 周年の祝典が都内の一橋講堂で開催された。皇太子徳仁親王殿下も臨席されて、『マナスルに立つ』という昔の映画を観た。京大学士山岳会が特別後援した集いである。会長という職責で「マナスル登山計画の端緒」と題して講演した。

8000 m 以上の山は 14 座しかない（本会が 1973 年に初登頂したヤルンカン 8505 m があるが、いちおうそれはカンチェンジュンガ西峰という社会通念上の位置づけにしておく）。1950 年アンナプルナにフランス隊が登ったのが最初で、64 年シシャパンマに中国隊が登ったのが最後だ。シシャパンマはチベット領にあり、中国しか登れないという特殊事情で初登頂が遅れた。そのわずか 15 年間に 14 座すべてが登頂されるなか、欧米列強に伍して日本がその一角を占めた。「日本隊によるヒマラヤ 8000 m 峰の初登頂」、それがマナスル登山の第一の意義であることは異論が無いだろう。

小論では、もうひとつの意義として、マナスルが、「登山 4 段階説」の最良の事例だということを指摘したい。

今西錦司（以下、敬称略）の著書『ヒマラヤを語る』（54 年刊）に、マナスル登山計画の端緒が詳述されている。この本の中で今西は、「山


Franz & Flora 様　第一信

十二月三十日

出発前には皆様に大変な御世話を
されたが、やっと30日[illegible]午前0時45分(Roc
time) に Calcutta の土をふみました。

羽田を発つときは全くの無一文で飛行
の切符さえも後払いでした。それは小生
東京での一切の費用が#2000ときまって
が26日でしたからそれから手配が出来なかった
です。勿論飛行機の中は一文もいりませんけ
Calcutta ではもしてうまく金が変取れるかど

写真1　1951年12月30日にカルカッタに到着したことを示す「西堀書簡」の第1信。

登りというものは4つの段階を経て発展する」と述べている。「出発の言葉」という章なので、実際には1952年秋のマナスル踏査の出発に際して述べられたものである。

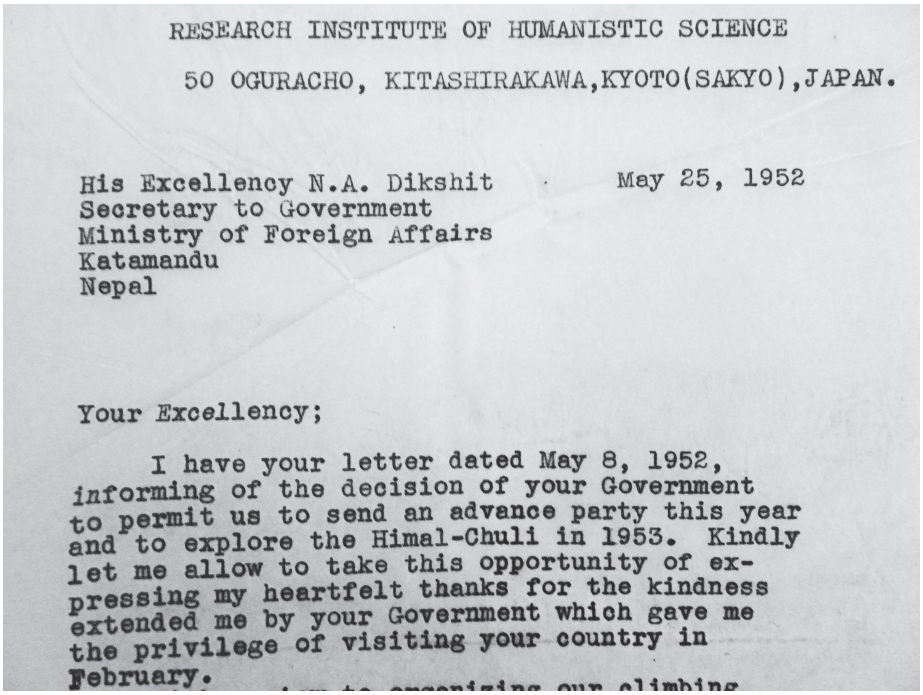
第1の段階は山の「発見」だ。どの山を登るか目標を定める。第2の段階は山の「探検」だ。どこから登れるのかを探る。第3の段階は、いよいよその山への「初登頂」である。第4の段階は、初登頂した山に別の方向から登る「バリエーション」だ。マナスルを例にその「発見→探検→初登頂→バリエーション」の4つの段階をなぞってみよう。

第1段階の山の発見を述べる。「マナスルへ」と誰が言い出したのか。それは今西ひきいる京大の岳人たちだった。当時の背景から述べる。ヒマラヤ8000 mへの挑戦はすでに第2次世界大戦以前に始まっていた。イギリスは世界最高峰エベレストに遠征隊を送り続け、ドイツはナンガパルバートに遠征隊を送っていた。しかし、戦争とネパールの鎖国で登山活動は途絶えた。1950年にネパールが鎖国を解いて登山を解禁した。日本は、1952年4月にサンフランシスコ講和条約が発効して独立国に戻った。逆にいえば、京大の岳人たちがマナスルを企画したとき、日本はまだ占領下にあり「Occupied Japan」という位置づけだった。

マナスルを登山の対象に見た最初の人は今西ではない。英国人登山家ウィリアム・ティルマンだと言える。1950年にマナスルを偵察し、翌年その記録を山岳雑誌アルパイン・ジャーナルに寄稿している。今西は、木暮理太郎の手によるヒマラヤ8000 m14座のリストをみて、すでに他の国が遠征隊を送った山を候補からはずし、ティルマンのわずかな資料しかないマナスルを対象に選んだ。1951年のことである。他国に気兼ねなく遠征隊を送れると考えたのだ。

第2段階は山の探検だ。探検とはいえ、そこはよその国の土地だ。第1歩は登山許可の取得である。今西は、盟友で英語にも堪能な西堀栄三郎にそれを託した。「西堀書簡」と呼ばれる、西堀が今西に宛てた当時の手紙約50通が残っている。書簡を整理した酒井敏明会員が、AACKニューズレターの62号(2012年9月号)に「西堀書簡」の経緯を紹介している。ぜひそちらを参照いただきたい。

かいつまんで言うと、1952年初頭に西堀は、インド科学会議への参加を口実として、ネパール外交の実権を握るインドへ交渉に出た。イン



RESEARCH INSTITUTE OF HUMANISTIC SCIENCE

50 OGURACHO, KITASHIRAKAWA,KYOTO(SAKYO),JAPAN.

His Excellency N.A. Dikshit　　May 25, 1952
Secretary to Government
Ministry of Foreign Affairs
Katamandu
Nepal

Your Excellency;

I have your letter dated May 8, 1952, informing of the decision of your Government to permit us to send an advance party this year and to explore the Himal-Chuli in 1953. Kindly let me allow to take this opportunity of expressing my heartfelt thanks for the kindness extended me by your Government which gave me the privilege of visiting your country in February.

写真２　1952 年５月 25 日ネパール外務省への発信で、５月８日に登山許可証が発行されたことがわかる。

ド首相のネルーに直接会い、さらには戦後初めての日本人としてネパールに入って９日間の滞在中に国王や首相に直訴した。そうした努力が実って５月８日付けでマナスルの許可が来たのである。

現在、「西堀書簡」は京大学士山岳会の手にある。そこで、念のために原典を拝見した。2 分冊のファイルである。英語のほうは整理がまだじゅうぶんではないのでそちらを丹念に追ったところ、「5 月 25 日付けで京大からネパール外務省に宛てた手紙」が出てきた。その文章に、「5 月 8 日付けで許可証が発行され、それを入手したことの御礼」が述べられていた。ここでいう許可とは 1952 年の踏査隊と、1953 年の本隊への許可である。なお、許可はマナスルという山名ではなくて「The Himal-Chuli」となっていた。マナスル・P29・ヒマルチュリという、いわゆるマナスル３山に対する呼称なのだろうか。いずれ許可証の本紙を探し出して事実を確認したい。

その同じころ京大は、全日本の体制をしくために、日本山岳会にマナスル登山計画を委譲した。計画の委譲と引き換えに、登路を探ったのは 52 年秋の今西ら５名の日本山岳会マナスル踏査隊だ。本会からは中尾佐助と林一彦が参加している。つまり５名中３名が京大で、日本山岳会の主宰とはいえ京大が実質的に登路の探検をしたといえるだろう。彼らはマナスルを時計回りに一周して、北東面に登頂の可能性を見出した。

第３段階の初登頂は、日本山岳会の手による遠征隊によって成し遂げられた。1953 年の第１次（三田幸夫隊長、京大の隊員は加藤泰安１名）、1954 年の第２次（堀田弥一隊長、京大の隊員はゼロ）、1956 年の第３次（槇有恒隊長、京大の隊員は今西寿雄１名）。3 回目の挑戦での成功だった。踏査隊が見出した北東面からのルートが採用された。登頂隊員の今西寿雄は 1953 年の京大学士山岳会のアンナプルナ２峰・４峰遠征隊の隊長だった。力量と経験においてずば抜けていたのだろうが、京大にとっては奇しき因縁としか言いようが無い。なお、マナスル第３次隊の出発前の 1955 年５月、登山基地となるサマ部落での入山拒否問題解決のために、日本山岳会の要請で西堀がカトマンズに行って交渉に当たった。日本のマナスル初登頂への西堀の貢献は、その最初から最後まで、きわめて大きかったと評価できる。

第4段階はバリエーションである。登るルートを変えたり、季節を変えたり、シェルパや酸素を使わないなど登り方を変える。実際に、マナスルの冬季初登頂、女性隊の初登頂など、マナスルのバリエーション登頂において日本が主要な役割を果たした。初登頂を契機に、マナスルは日本の山として、その後も多くの日本人登山家をひきつけてきたといえる。

「発見→探検→初登頂→バリエーション」という山登りの4つの段階は、そのまま学問の展開にもあてはまるだろう。何を研究するのか、まず目標を定める。次に文献や資料にあたり、実際に予備的な研究をして課題解決の道を探る。そしていよいよ初登頂に相当する新発見や新発明をする。さらにバリエーションとして、別の角度からその研究を深める。京大学士山岳会の山登りや、京大学士山岳会に集う研究者の多くが、この4段階の発展を登山や学問で実践してきたのではないだろうか。

マナスルで登山の4段階を体験して、今西や西堀は新たな目標に向かった。今西は、55年にカラコルムの4大氷河の連続踏査をおこなった。単に高みを求める垂直から、地図の空白部の踏査を目指す水平へと、探検の方向性を切りかえた。さらに1958年には伊谷純一郎と初めてアフリカに出かけて、野生類人猿すなわちゴリラとチンパンジーの長期継続調査を始めた。これが霊長類学の確立へと続く道だった。西堀は、1956年11月に南極に向かい、日本初の南極越冬隊の隊長を務めた。

本年のマナスル初登頂60周年を契機に、来年は南極初越冬の60周年になり、再来年の2018年はチョゴリザ初登頂の60周年になる。同じ1958年には、中尾佐助のブータン調査がおこなわれ、川喜田二郎の西北ネパール調査もあった。京大学士山岳会の使命のひとつが、こうした過去の貴重な資料のアーカイブ化ならびに公開にある。会員諸兄姉の協力と理解を得てそうした事業を進めていきたい。なお成果は、昨年度に新たにオープンしたホームページで公開している。そちらをぜひ参照されたい。
http://www.aack.info/

「ザ・マナスルデー」の報告

榊原雅晴

マナスル登頂60周年を記念して、今年5月、東京都千代田区の毎日新聞東京本社周辺で数々のイベントが開かれた。マナスル登山は京都での計画段階から毎日新聞社がスポンサーとなり、支援を続けてきた。その縁で「ダイヤモンド・ジュビリー（60年の節目）」を祝おうという企画が持ち上がったのである。

メインのイベントは一橋講堂で開かれた「ザ・マナスルデー」（毎日新聞社主催、日本山岳会・京都大学学士山岳会特別協力）。講師を務めた

「ザ・マナスルデー」で講演する松沢さん。映像はヤルンカンでの西堀隊長

式典を終えた松沢さん、斎藤さん、今西邦夫さん（左より）

松沢哲郎・AAKC 会長のほか、元日本山岳会会長の斎藤惇生さん、日本山岳会副会長の山田和人さん、同理事の中山茂樹さんら多くのAACK 会員も参加した。一般聴講も含め参加者は約 500 人に達した。

第一部　記録映画上映とトーク

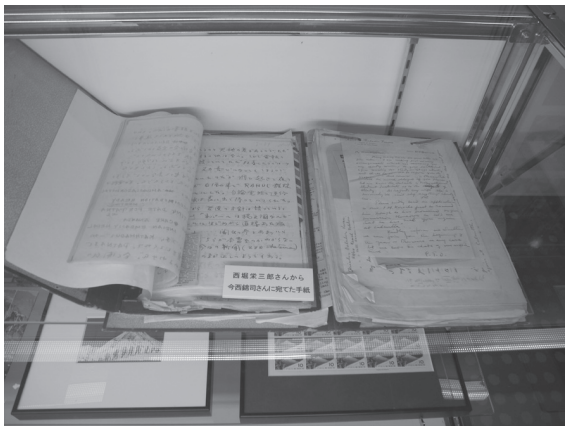
まず 8000 m 峰 14 座すべてを日本人でただ一人登頂したプロ登山家の竹内洋岳・立正大学客員教授の解説で記録映画「マナスルに立つ」（1956 年公開、30 分短縮版）を鑑賞。

その後、第 2 次アタックで登頂した日下田実さん（85）＝早稲田大学 OB ＝、槇有恒隊長の長男恒治さん（83）、初登頂者・今西寿雄さん（AACK）の長男邦夫さん（63）らが「マナスルの偉業を語る」と題して話し合った。司会は「梅棹忠夫　未知への限りない情熱」（山と渓谷社）の著書がある作家の藍野裕之さん。

日下田さんは「南米アコンカグアの遠征で卒業試験を受けられず、1 年留年した。6 月に帰ってきて、8 月にマナスル第 2 次隊員に指名され、食料担当になった。栃木の実家に帰るという約束を果たせなかったが、オヤジも早稲田の山岳部創設のころ、少し籍を置いていた。若いころしかできないから、やるだけやってこいと送り出された」と隊員に選ばれたときのいきさつを語った。司会者から「第 3 次隊で登頂しましたが、困難なルートはどこでしたか」と問われ、「第 3 キャンプまでのアイスフォール通過と、エプロンルートの急斜面くらい。全体としてはあまり難しいところは少なかった」と答えると、会場から笑いが起きた。

槇さんは「父が隊長を務めたのは 61 歳のこと。53 年の第 1 次隊、54 年の第 2 次隊が失敗し、次は父が隊長をという話は早くから聞いていた。しかし年齢や体力の面でなかなか決心できなかったと思う。引き受けてからは自宅近くの海岸を毎日歩いていた。砂の上を歩くのが体力を付けるのにいいのだと言って 3 キロから 4 キロ。自分の人生の集大成だと思っていたようだ」と振り返った。

今西さんは「（父が）マナスルに登ったときは 41 歳、私は 3 歳でした。家業は建設業なので、祖父から『早く仕事に戻れ』と厳しく言われていたようです。マナスルの後、西堀栄三郎先生から南極にも誘われたが、思いを断ち切ったみたいです」と話した。第 1 次アタック隊に京大が選ばれたことを「今西錦司先生や、AACK への思いを槇さんからいただいたと、酒が入ると話していました」と述べた。



会場に展示された「西堀書簡」

一方、槇さんは「（アタック隊の選考について）家では何も話しませんでしたね。隊員の技量や体力、いろんなことを勘案して決断したのだと思う。父は登山では謙虚であれといつも言っていました。すべてを把握、研究し、ダメだと思えばすぐに引き返さなければ遭難につながると言っていましたから」。

◇

会場受け付けロビーには、登山許可取得に道筋を付けるため 1951 年末から 52 年 3 月にかけインド、ネパールを訪れた西堀栄三郎さんが、京都の今西錦司さんに送った報告の手紙約 50 通をまとめた「西堀書簡」や、当時の写真類、ピッケル、頂上に掲げたネパールと日本の国旗、撮影に使われたカメラなど貴重な資料も展示。日本山岳会会員で、当日、会場を訪れた皇太子さまも興味深そうに見入った。槇隊長が子供向けに書いた「マナスル登頂物語」を見つけ、「小学生のときに読みました」と懐かしそうに話していたという。

第二部　冒頭レクチャーとトーク

第二部では松沢・AACK 会長が「マナスル登頂計画の端緒」としてレクチャーをしたあと、竹内さんと「山の魅力、マナスル遥かなり」のテーマで話し合った。司会は山と渓谷社山岳図書出版部長の萩原浩司さん。

デジタル化される記憶映画「マナスルに立つ」のパンフ（復刻）

この60年間のヒマラヤ登山の変化について竹内さんは「私は2007年にドイツの国際公募隊に参加してマナスルに登った。60年前と比べもっとも違うのは通信機器の発達だ。昔はインドからラジオ放送で天気予報を流してもらった。07年は衛星回線でインターネットを使い天気予報を得て、ピンポイントで登頂日を選んだ」と体験を披露。マナスルが今でも「日本の山」と呼ばれていることについて「マナスルは公募登山でも人気の高い山だが、外国人登山家の間でも日本の山という認識は定着している」と述べた。

松沢さんは「1973年と84年の2回、カンチェンジュンガに行ったが、キャラバンルートが10年余りでずいぶん違った。84年は半分を飛行機で行った。昔は2週間、3週間かけてヒマラヤが近づいていく行程が楽しめた。よくも悪しくも、その過程が圧縮されている」と話した。

竹内さんは「チベット側からマカルーを登攀したが、チベット人のところに1カ月ぐらい居候しながら登路を探った。探検登山の最後のようなことを経験した。今思えば、山は頂上だけでなく、そこに到るまでの人々の生活や習慣、食べ物を自分の中に取り込み、適応していく過程を楽しむことが大切ですね」と、頂上に到る過程の大切さを強調した。

今年、国民の祝日「山の日」（8月11日）が誕生することを踏まえ、山登りの未来について松沢さんは「ヒマラヤの場合は黄金時代があって、1950年のアンナプルナから、1964年のシシャパンマまで15年の間に8000 mがすべて登られた。『金の時代』は実は15年しか続かなかった。その後はルートを変え、季節を変えた『鉄の時代』。その次に来たのは『銀の時代』で、シルバーエイジの人々でも準備さえ整えればヒマラヤに登れる時代を迎えた。これからは一言ではくくれない多様性の時代になった。山自体は何も変わっていないが、いろいろな人が、いろいろな目的で登るようになった。私にとってそれは研究だが、AACKのミッションとしても気候、氷河、植生などの研究者の目からみて意義のある山との関わり方を探していくことが大切だ。それがパイオニアワークだと思う」。竹内さんも「私は8000 m14座すべてを登ったが、『14座』でくくれる山はなかった。一つ一つが違う個性と魅力を持った山だ。8000 mという規格品を14座登ったわけでなく、エベレストであり、K2であり、マナスルだった。一つの頂上に立ったとき次の登りたい山を見つけてきた。14座登ったときに『これで14座以外も登れる』と仲間とメールを交わした。今後は決して高くなくても、私にとっての未踏峰に登りたい」などと、山の多様性を語った。

京都大でも8月にマナスル60周年イベント

東京だけでなく、京都大学時計台大ホールでも8月6日（土）に「マナスル60周年」を記念したイベントを京大学士山岳会と毎日新聞社とで計画している。目玉は記録映画「マナスルに立つ」（山本嘉次郎監督、ナレーション・森繁久弥）のデジタル復刻版全編上映（108分）。

同映画はVHSなどで映像化されたものが一部で流布されているが、画質に難点がある。貴重な映像データを後世に残すべく、今回、劇場上映された元のフィルムを洗浄修復し、デジタル化する作業を進めている。京都が本邦初の公開になる。詳細は後日、会員に連絡する。

妙高笹ヶ峰音楽祭

原　剛

笹ヶ峰の京大ヒュッテで2005年5月28日に第1回音楽祭を始めてから今年で11年目になります。年2回やったこともありますので回数にしたら15回です。まさかこんなに続くとは思ってもいませんでしたので私自身驚いています。最近忘れっぽくなってきましたので、自分自身の記録としても、始めたいきさつや途中のエピソードを思い出してここに記します。

1999年11月に京大ヒュッテが改築されたときに、これだけ立派な小屋ができたのだから山やスキー以外にも何か使えるのでないかと京大山岳部OBと酒の席で話していた記憶があります。しかし実際には結構面倒なので何もしないでいるうちに私は大病にかかり一年間入院をし、後遺症で山登りやスキーができなくなりました。これではせっかくのヒュッテライフも楽しさが半減します。そこで思い出したのはヒュッテでの山、スキー以外のイベントです。そのとき思いついたのはクラシックコンサートと講演会です。確かに山でクラシックを聴くのは素敵で格好もよさそうですが、しかし同時に果たして並みの京大山岳部OBがそんなに音楽好きか怪しいとも思えたのです。私自身に照らし合わせてみると義理以外でコンサートに行ったこともなく、行った時もいつも眠っていました。一部の例外の方を除いては、大半は私と同じレベルではないかと思っていましたので、実行可能かどうか半信半疑でした。しかしながらホラはタダですから酒を飲んだ席ではいつもこれを話していました。たまたまその席にいた京大山岳部OBの島田喜代男氏がもし赤字が出たら自分が負担するからぜひ実行しろと言ってくれたのですが、それには条件が付いていたのです。それはやる以上は本格的な「格調」の高いものにしろ、例えば自分が留学していたとき、ボストンフィルが夏休みにマサチュセッツ州タングルウッドで行っていた音楽祭（当時は小澤征爾が指揮者だったそうです）のようにしたら良いと大きく出てきたのです。私はタングルウッドなど聞いたこともないので意味が分からず困惑しました。家に帰って妻に話したところ

2015年のコンサートにて、ヴァイオリニストの眞田彩さん

たまたまプロのバイオリニストと知り合っていたので、演奏してくれるか聞いてみるとえらい乗り気になってきて、さっそく演奏家に問い合わせをしたのです。バイオリニストは伝田正秀さんと言って当時は20代の新人でしたが、日本音楽コンクール2位の実力者でしたが出演を快諾してくれました。その後同じくOBの笹谷哲也氏、原田道雄氏にも相談したところ、後援するとのことで資金面の心配はなくなりました。結局、音楽面は妻が担当し、わたくしは参加者募集、会場設営、懇親パーティの準備を担当することになりました。資金面ではさらに複数のOBの方々が加わって応援してくれることになりました。実際にはこれが最大のネックでしたので非常に感謝しています。

何しろ初めての経験ですからおっかなびっくりでスタートしたのです。島田氏の「格調高くやれ」の一言が耳に残り、よくある素人の山小屋コンサートでなく、グランドピアノを借りてきて、また演奏者も燕尾服、ドレスで正装してもらったのです。パーティも立食形式にして、いつものおでんや鍋に日本酒ではなく、オードブルから始まる洋食にしました。飲み物はワインを主体としましたがここは伝統を守って飲み放題にしました。参加者はさぞ驚くだろうと思うとうれしくなり準備に熱中しました。ただ問題は会場のヒュッテの食堂はいったい何人収容できるのかが分からず困ったのを覚えています。そこで事前にピアノの置き場所を決め、実際に椅子を並べてみて収容人数を試算し35人ぐらいまでなら何とかなるだろうと判断し笹ヶ峰会のメーリングリストを使って参加者を募集しました。この時応募してきた方々はどんなコンサートになるかわからなかったわけですから今から思えばなかなか勇気がある人たちです。主催する本人のほうですら具体的なイメージを持っていなかったのですから彼らにも感謝しています。コンサート当日は午後3時30分に開演しアンコールが続いたのですが5時30分に何とか終演し、そのあとパーティとなり非常に盛り上がって9時ぐらいにようやく終わりました。参加者はプロの演奏を目の前で聞く臨場感と、演奏者のバックに黒姫がそびえる素晴らしい景色に皆興奮したと思います。パーティでは伝田さんもピアニストの片岡美津さんも参加して伝田さんの即興の演奏を交えながら歓談できたのも楽しい思いです。

そこでぜひ来年もやろうとのことで第2回音楽祭は翌2006年の6月にやりました。ここに記録のために第2回以降の出演者のリストを掲げておきます。ピアノ、ヴァイオリン以外にもずいぶんいろいろなことをやっていたのだなと我ながら驚いています。

第2回

宮内夕佳里ソプラノリサイタル（川名亜由子ピアノ）2006.6.30

伝田正秀ヴァイオリンリサイタル（片岡美津ピアノ）2006.7.1

第3回

ピアノトリオ：伝田正秀（ヴァイオリン）片岡美津（ピアノ）朝吹元（チェロ）2007.10.20

第4回

ピアノトリオ：伝田正秀（ヴァイオリン）片岡美津（ピアノ）朝吹元（チェロ）2008.5.31

早川育フルートリサイタル（山中和子ピアノ）2008.6.1

第5回

伝田正秀ヴァイオリンリサイタル（片岡美津ピアノ）2009.6.6

中川美和クラシックサックスリサイタル(山中和子ピアノ）2009.6.7

第6回

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（中谷政文ピアノ）2010.6.5

宮下靖弘テノールリサイタル（山中和子ピアノ 2010.6.6

第7回

伝田正秀ヴァイオリンリサイタル（片岡美津ピアノ）2010.10.17

第8回

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（寺嶋千紘ピアノ）2011.6.4

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（寺嶋千紘ピアノ）2011.6.5

この回より2日目は笹ヶ峰周辺に山小屋を持つ京都大学山岳部、横浜国大ワンダーフォーゲル部、早稲田大学ワンダーフォーゲル部、武庫川女子大山岳部の共催とし、参加者も一般公募としました。またこのときは福島原発事故で妙高市へ避難されていた方々を招待しました。子供たちが大変喜んでいたのが印象的です。たぶん音楽より野外でのバーベキューパーティやブランコ、ハンモックがうれしかったのだと思います。

第9回

伝田正秀ヴァイオリンリサイタル（別所ユウキピアノ）2012.6.2

伝田正秀ヴァイオリンリサイタル（別所ユウキピアノ）2012.6.3

2日目の一般公募の会場をヒュッテ室内でなく野外ステージで行うことを決断しました。ステージは地面を平らにしその上に芝生を張って目立たないようにしました。これ以降天気の心配まですることになりまし

たが、雨で中止になったことはないのが奇跡的です。中には台風接近でコンサートが終了した直後に風雨になったこともあります。このような完全に野外で行うクラシックコンサートは大変珍しいようです。というよりは雨の多い日本では、普通の人はこのようなリスキーなことはしないのかもしれません。

第10回

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（山中和子ピアノ）2012.9.29

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（山中和子ピアノ、塩嶋達美フルート）2012.9.30　野外ステージ

第11回

松永貴志（ジャズピアノ）Code Maki（ピアノ）眞田彩（ヴァイオリン）2013.6.1

松永貴志（ジャズピアノ）Code Maki（ピアノ）眞田彩（ヴァイオリン）2013.6.2　野外ステージ

第12回

ピアノトリオ：伝田正秀（ヴァイオリン）伝田正則（チェロ）伝田美樹（ピアノ）2013.9.28

ピアノトリオ：伝田正秀（ヴァイオリン）伝田正則（チェロ）伝田美樹（ピアノ）2013.9.29　野外ステージ

第13回

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（深井千聡ピアノ）2014.5.31

眞田彩ヴァイオリンリサイタル（深井千聡ピアノ）2014.6.1　野外ステージ

第14回

ピアノトリオ：眞田彩（ヴァイオリン）別所ユウキ（ピアノ）山本直輝（チェロ）2015.5.30

ピアノトリオ：眞田彩（ヴァイオリン）別所ユウキ（ピアノ）山本直輝（チェロ）2015.5.31　野外ステージ

この10年間で変わったことは参加者が前日のコンサートで35名から50名近くに増えたことと、翌日の一般公募では野外ステージのため、80名近くが参加するようになったことだと思います。室内の50名弱は少し多すぎるのですが、運営採算上勘弁してもらっています。またこの音楽祭の影響かどうかわかりませんが、これ以外のクラシックコンサートに行く人が増えているようです。わたくしもコンサート会場で寝なくなりました。ほんのわずかですが、日本の文化的水準の向上に寄与しているかもしれません。

もう一つ、これは音楽とは関係ありませんが、京大ヒュッテは、講演やセミナーなどいろいろな催しに十分使えます。宿泊などは地元のペンションや民宿なども利用できますし、料理も地元の方に手伝いをお願いできますので、それほど手間はかかりません。京大ヒュッテを知らない参加者はヒュッテの素晴らしい雰囲気に感嘆するようで、主催者は大変感謝されます。また収容力が小さいのが逆に幸いして、知らない同士でも非常に親密になれます。その意味でも催しの後の懇親会は欠かせません。

また笹ヶ峰は、山に登れなくても、付近を遠足するだけで楽しめます。世界でも珍しい豪雪地帯特有の動植物を観察できます。杉山茂さんのようにこの15年間笹ヶ峰に通い詰めて今では笹ヶ峰の生態についてはプロも顔負けの知識と情報を持っている人もいるので案内をお願いしてもよいでしょう。このわたくしが言うのはおかしなことですが、ヒュッテが酒盛りの場所から堅苦しくならないことを前提に教養の場所になることはよいことかもしれません。PWSの合宿に参加された方の記録を読むと世代差を感じますが、同時に彼らの新鮮な視点も理解でき、ヒュッテも役に立っているなと感じます。

図書紹介

私のシュプール　Ⅰ　ハガスキーの歴史と私の登山

著者：芳賀孝郎　カバー装画・挿絵：芳賀淳子

2016 年 1 月 30 日発行　ISBN 978-4-86368-049-4　定価：本体 1500 円＋税

平井一正

本の紹介のまえに著者と私の関係を紹介しておきたい。

芳賀（以下敬称略）と私の関係は古い。1955 年冬、学習院大学山岳部が鹿島槍天狗尾根で遭難し、4 人が雪崩で死んだ。そのとき、脇坂、岩坪、荻野、吉葉と私の 5 人は鹿島槍から黒部川を横断し、剣を目指すために同山域に入っていた。しかし悪天候のために鹿島槍南槍の頂上でテントをかぶって 3 日間のビワークのあと敗退した。下山後､学習院の遭難を聞いて、私と脇坂が救援に駆けつけた。そのときに多くの学習院の山岳部員と知り合ったが、芳賀はその中にいた。

彼と再会するのは、1958 年のチョゴリザ遠征のときであった。京大と学習院の歴史的関係から、学習院からひとり隊員に加えてほしいという松方会長からの要請によって、芳賀が選ばれた。当時若い隊員は 3 隻の貨物船に分乗してパキスタンへ行ったが、私は芳賀と、飯野海運の若島丸という貨物船で行くことになり、約 1 か月の間船上生活を共にした。そしてチョゴリザ登山では、彼は先頭になって登頂をサポートした。チョゴリザ登頂のあと、ビアンジェ氷河をさぐり、その流域の山を調査するために、私と芳賀は本隊と離れて 1 週間、行を共にした。だからチョゴリザのときは往きの貨物船を含めて彼と一番密に付き合ったことになる。その後もいろいろな機会で、芳賀とは交流が続いている。

その彼がこのたび表記の本を出版した。副題にあるように彼が先代から引き継いだハガスキーの誕生から終焉までの歴史、彼が活躍した国内の山やチョゴリザ、隊長で行ったチョーオユーなど、登山の歴史、多くの先輩、仲間、知人などの交遊録等々が紹介されている。

第一部は芳賀の父君が創設したハガスキーの 1917 年の誕生から、1991 年に倒産するまでの歴史を書いている。スキー製造に関する苦心談や北大スキー部との交流、1971 年に父君の死にともないハガスキーの社長となってから、外国産スキーに対抗するための苦心、歩くスキーの推進と普及に対する努力、種々なスキー大会とそれに関するエピソード、倒産に追い込まれる事情と反省などが興味深い。

第二部は登山に関して､学習院大学に入学後、山岳部での活動、チョゴリザ隊への参加がきまるまでのエピソード、そしてチョゴリザでの活躍、登頂後、現地食だけで試登した 7170 m 峰のアルペン登山の記録などが書かれている。登山記録も興味あるが、そのほかに登山の先輩と仲間たちの紹介や交遊などが楽しい。特に加藤泰安さんの語録やエピソードが本の全体にわたってちりばめられているのは、泰安さんにお世話になった私にとってなつかしく読ませる。そして泰安さんの精神がちゃんと芳賀など学習院の後輩にうけつがれていることが分かり、嬉しい。

芳賀は現在の天皇陛下と大学の一年後輩であり、泰安さんの紹介で、チョゴリザのときにお下賜金を頂いたことがある。その関係で、チョーオユーのときには皇太子殿下からお下賜金を頂くなど、余人では真似できない皇室とのつながりがある。また日本山岳会の年次晩餐会のときに、皇太子殿下に紹介してもらった仲間は私を含めて多い。このほか、外国の山岳会を訪ねたときの話、さらに学習院大学山岳部と AACK の関係などについても書かれている。

著者芳賀には人生の大きな岐路が三つある。それは学習院大山岳部に入ったこと、1958 年のチョゴリザ登山隊に参加したこと、そしてハガスキーの倒産とそれからの仕事である。多くの困難があったが、それを乗り越え、日本山岳会の副会長をはじめ、種々の要職をこなしてきた。この本を読んで彼の生きざまの片鱗がしのばれる。あまり物事に動じず、権威を怖れず、いつも愛嬌のある顔で人に接し、誰からも憎まれない芳賀の人となりがよくわかる好著である。

彼の愛妻淳子さんの父君は、マナスル第一次隊長をつとめた三田幸夫さんであり、彼の今あるのは、ひとえに彼女の支えがあってのことである。本書のカバーや挿絵に淳子さんの筆になるスケッチがあるのは楽しい。またこの関係でアルバータの頂上のピッケルにまつわる秘話なども書かれている。

2016 年 AACK 関東会・笹ヶ峰会　合同新年会

山岸久雄

本年 1 月 21 日（木）18 時 30 分より、東京都中央区日本橋の東レ社員クラブにて、恒例の AACK 関東会・笹ヶ峰会合同新年会が 25 名の参加者を得て開催された。本年も長老の並河治さんが元気なお顔を見せてくださった。また、特別ゲストとして、学習院山桜会前会長の贄田統亜さん、新会長の藤大路美興さんが参加された。昨年亡くなられた AACK 会員への黙祷の後、並河さんから乾杯の発声、贄田さん、藤大路さんからご挨拶いただいた。おいしい料理と飲み放題のお酒で歓談が続く中、雲南懇話会の前田栄三代表幹事から活動状況の報告が、また、上越市から特別参加された AACK ニュースレター編集幹事の横山宏太郎さんからニュースレターへたくさんの投稿をお待ちしますとの挨拶があった。その後、アトラクションとして、伊藤寿男さんに 2015 年 8 月に行かれたラダック、ツォーモリリ湖周辺の山旅の美しい写真を、山編、動物編、花編に分けて上映していただいた。この山旅に参加された谷口朗さんは体調不良のため、新年会を欠席されたが、近況報告のメッセージが届いており、披露させていただいた。

学習院山桜会・藤大路会長のご挨拶を聞く会員たち

その後、各世代の会員から近況報告があり、最後に懐かしい部歌、山の歌を歌って散会となった。この新年会は毎年、1 月後半に開催されます。現役世代の皆様のご参加をお待ちしています。会場をお借りするにあたり、田中健一さんにお世話になりました。新年会幹事より感謝申し上げます。

第 36 回雲南懇話会（2016 年 3 月 19 日開催）　講演概要

山岸久雄、安仁屋政武

第 36 回雲南懇話会は 2016 年 3 月 19 日、東京都新宿区市ヶ谷の JICA 研究所国際会議場で開催され、124 名の参加を得て、盛況裡に終了しました。以下、講演の概要を紹介いたします。

1.「カイラス巡礼とグゲ王国」―西チベット・古格王国（842 年～ 1630 年）への旅路―

都留市文化協会副会長、写真家　藤本 紘一

藤本氏は 2004 年から 2015 年にかけて 3 回にわたり西チベットのカイラス山（カン・リンポチェ、6656 m）を中心とする地域へ、また東チベットには 5 ～ 6 回にわたり旅を重ねてきた。同氏のチベット探求の動機は中村保氏の著書であったとのこと。その熱き思いを、旅に同行した都留山岳会の仲間の紹介、自身が実践した五体投地の体験などを交え、語られた。カイラス山を五体投地で巡る巡礼者の姿、カイラス山、カイラスから 160 km 西方、ツァンダ周辺のグゲ遺跡、トリン寺、ピアン・ドゥンカル石窟群の仏像、仏教壁画、建築物など、写真家の手になる写真はいずれも見ごたえのあるものであった。3 回の旅を通じて、同地域が巡礼の地から観光の地へと変わりつつある印象も語られた。

2.「標高 8,000 m から眺めた星空の魅力」―マナスル峰で試みた天体観測―

（元）プラネタリウム解説員　村山 孝一

村山氏は地球上で最も宇宙に近い場所、ヒマラヤ山脈 8,000 m 峰で天体観測を行った。そこでの星空はどんなだろう？それを紹介する前に、同氏は 20 年にわたるプラネタリウム解説員の経験に基づき、星空観察の魅力を、科学を交え、わかりやすく説明された。講演時間の制約から「標高 8,000 m から眺めた星空」の写真の多くを見ることはできなかったが、その特徴は、瞬かないため平面的に見える。星が有り過ぎ、星座がわからなくなる。周囲が暗過ぎ、人間の眼が暗所適応した結果、星の色を認知しにくくなる、ということであった。われわれが身近な山で眺める星空の方が、むしろカラフルで、きらめきがあり、ロマンをかき立ててくれるらしい。最後に、昨年のネパール大地震の際、同氏が滞在していたエベレストベースキャンプの生々しく迫力ある写真が紹介された。

3.「ハニ族における稲作農耕と伝統的知識の継承」―雲南省紅河州に見る棚田文化―

首都大学東京 人文科学研究科博士後期課程
（中国雲南省）紅河学院国際ハニ／アカ研究所
訪問研究員　阿部 朋恒

2013 年に「紅河ハニ棚田群の文化的景観」が世界遺産に登録され、ハニ族の伝統農法がにわかに注目を浴びるところとなったが、これに先立つ 2011 年 9 月から 2016 年 2 月の間、阿部氏は延べ 24 ヶ月にわたりハニ族の村に住み込み、調査を行ってきた。在来種の赤米栽培を中心に営まれてきた伝統農法は、市場経済化の要請の下、急激な変化にさらされている。伝統的な農耕技術や知識の継承が困難になりつつある現状が、美しい棚田の風景とともに語られた。同氏は「論文を書くための調査」がひと段落した今、学問と少し離れたところで、「ハニ族のやり方」を次世代に繋いでゆくための試み（赤米を使った高付加価値商品の開発）に取り組んでいる。「世界遺産登録」が持つ意味をハニ族の人と議論する中、同氏は現地の人と外部の人が「同じものを見る」ことの難しさと大切さに気付いた。開発や調査研究で起こりがちな「する側／される側」の非対称性をどう乗り越えるか？「同じものを見る」ための方法が問われている。

4.「浮上式鉄道開発の経緯と中央リニア新幹線の動向」―夢・今・これから―

（元）（公益財団法人）鉄道総合技術研究所
技師長　藤江 恂治

雲南懇話会では初の工学に関する講演は、2027 年に東京～名古屋間で開業が予定され、世間の関心が高まっている超電導リニア新幹線の開発経緯に関するお話である。藤江氏は鉄道総合技術研究所で超電導リニアの開発に責任者として長く携わってこられた。講演では開発が開始された 1962 年からの 50 年間の歩みにつ

いて語られた。話は1962年のリニアモーター車の開発から始まる。1966年、米国で超電導磁気浮上のアイデアが発表されて以来、諸外国が開発を中途で諦める中、国鉄技研は実験車両を開発し、側壁浮上方式など日本独自の技術開発を重ね、速度の世界新記録達成や安定浮上走行の実証に成功してきた。その後、同氏は宮崎実験線センターの責任者として実用化の基盤技術の確立に努め、山梨実験線での走行実験につなげられた。多くのVIPが試乗されるなどの華やかな面とともに、開発途上で遭遇したご苦労などについても語られた。

5.「DNAから見た日本人の起源」―日本人成立の経緯―

（独立行政法人）国立科学博物館
人類研究部長　篠田 謙一

われわれは何者か？どこから来たのか？　私たちが抱く根源的な問いに、近年のDNA分析は答えを与えつつある。篠田氏は昨年、化石人骨のDNA分析の最新成果をまとめた「DNAで語る日本人起源論」という大部の本を著されたが、本講演ではそのエッセンスが語られた。日本列島のヒト集団の遺伝的変遷を、アジアにおけるヒトの移動の文脈の中で語るお話は内容が豊富で、これを限られた時間で語り尽くすには、同氏のやや早口な語りがちょうど良い感じであった。聞くほどに湧いてくる知りたい事柄が、次々と現れる図で解明され、知的好奇心が満たされる講演であった。

第37回雲南懇話会のお知らせ

1. 日時：2016年6月25日（土）12時45分～17時30分。茶話会17時30分～18時40分
2. 場所：JICA研究所 国際会議場（東京都市ヶ谷）
3. 懇話会の内容（講師、演題など変更ある場合は、ご了承をお願い致します）。

①「中国雲南省、梅里雪山―人々の祈り、山麓の暮し―」
昆明理工大学院生（当時）
斯那扎史（スナチャシ）

②「中国チベット自治区・未踏の霊山 カイラース―四宗教の複合的聖地―」
東洋大学大学院客員教授（インド哲学・ヒンドゥー教思想）　宮本 久義

③「ネパール、聖地 カトマンドゥ―ヒンドゥー教・仏教・民俗信仰の複合―」
東京外国語大学名誉教授（文化人類学）
石井 溥

④「インド、ブータン国境の聖地巡礼―アルナーチャル・プラデーシュとメラの事例から―」
日本ブータン研究所 研究員、博士
（社会学：慶應義塾大学）　脇田 道子

⑤「南インドの山と森の信仰―カルナータカ州のブータの場合―」
日本山岳修験学会会長、
慶應義塾大学名誉教授　鈴木 正崇

AACK Newsletter No.76掲載の記事、「ラダック山脈、ゴンマ峰他に初登頂（2012）」栗本俊和著について

編集人　横山宏太郎

1. はじめに

標記の記事が掲載された76号が発行された後、阪本公一会員から電子メールでご意見をいただいた。その要旨は、標記記事の栗本俊和会員の登山は無許可違法登山と考えられること、そのような登山の記事をAACK Newsletterに掲載することは問題ではないか、ということであった。

それを受けて編集人としては、編集人の見解だけでなく阪本会員、栗本会員双方の見解も次の77号に掲載しようと考え、お二人に寄稿を依頼した。栗本会員は承諾されたが、阪本会員は断られた。しかし、阪本会員は、この登山許可の問題に関しては、Newsletter 64号（注記参照）ですでに指摘しておられるので、それを簡単に引用紹介する。詳しくはもとの記事をご覧いただきたい。

2. 登山許可について

外国で登山を行う場合に、その国の関係法令・

規則を順守すべきことは論をまたない。

阪本会員は「近年ラダックやザンスカールで、無許可違法登山が激増しており、インド・ヒマラヤの登山管理をインド政府から委託されているIMF（Indian Mountaineering Foundation）も頭を痛めている。」という書き出しで、公募登山の形式で実施されているらしい無許可違法登山の実態を紹介し、その問題点を指摘されている。文中で、「AACK会員某氏が公募隊の客として参加した」と例示された登山が、栗本会員の記事の登山である。無許可違法登山は処罰の対象となるのは当然であることに加え、未踏峰の許可を正式に取得して登頂しても、誰かがすでに登ったらしい痕跡を発見するということが起こる。阪本会員が協力し情報を提供された京大山岳部隊（2012）、日本山岳会学生部隊（2012）で現実にそれが起こったのは、たいへん残念なことであった。

栗本会員は、レー在住のエージェント、マクギネス氏が募集、隊長を務める隊に参加された。以下では、これをマクギネス隊と呼ぶ。

阪本会員がIMFにマクギネス隊について問い合わせて得られた回答文書によると、

1) IMF本部は、この隊への許可は発行していない。
2) IMF本部には、これらの山が登られたという記録はない。
3) IMF本部でのbriefing/debriefingは行われていない。
4) IMF本部へマクギネス隊からの報告等はない。

とのことである。また、マクギネス隊は、IMFが定める登山規則（IMFのウェブサイトに公開されている）により必要となるIMF（本部＝デリー）からの登山許可およびX-mountaineering Visaは取得していないこと、またリエゾンオフィサーの同行はなかったことは、栗本会員も認めておられる。したがって、この隊が、IMFの示す登山規則に反していることは明らかである。

3. 記事の掲載について

この記事は、栗本会員から投稿された原稿を、一部細かい字句等の修正を経て掲載したものである。この登山については、阪本会員が先に述べたと同じ指摘を過去にも電子メールで発信され、横山もそれを見ていた。しかし、栗本会員から、雑談のなかではあるが、レーで許可をとっているので問題ないという発言を聞いていたことと、その指摘を承知のうえで投稿されたことから、事情を詳しく検討せずに問題はなかろうと考え、掲載することにした。

いま、この登山がIMFからの登山許可を得ておらず、またIMFの登山規則に違反していることをあらためて考えれば、そのような問題を含む登山であることを、登山の概要と同時に読者に伝えるべきであった。

そのためには、まず、著者栗本会員には、そのことを含めて執筆して欲しかった。特に、このような登山が行われている実態を知らせようという意図があるなら、なおさらのことである。

一方、今回投稿された原稿に対しては、事情を確かめた上で、編集人から原稿修正を要請する、あるいは編集人が注記する、といった対応が必要であったと考える。それができなかったのは、編集人・横山の不明によるものであり、会員・読者の皆様にお詫び申し上げる次第である。

4. まとめ

編集人としては、上記の反省を踏まえ、記事掲載にあたり同様の問題が起こらないよう、今後注意して行くつもりである。

この問題に関する栗本会員の見解は、本号別項に掲載している。レーでの許可取得に関しても述べられているが、その具体的な根拠となるものが示されていないことは残念である。

インド国内の登山許可関係は、IMFのもと一元化されているはずである。しかし、実際にIMF本部の許可を得ない登山が行われていることを見ると、その一元化がはやく実質のものとなることを期待したい。

このたび阪本会員をはじめ多くの会員や、会員以外の方からも貴重な情報やご意見をいただきました。記してお礼申し上げます。

文献

ザンスカールの未踏峰登山（京大山岳部ヌガツオ・カンリ（6080 m）初登頂によせて）
阪本公一
64号13-17ページ（主に後半に記述）

AACK Newsletter No.76「ラダック山脈、ゴンマ峰他に初登頂（2012）」
―2012 年に行なった登山の経緯と掲載文（文言）の訂正について―

栗本俊和

1.【2012 年登山の経緯】

(1) 2012 年 7 ～ 8 月、私は、地元ラダック／Leh で Project-Himalaya.com（以下、「PH 社」という。）を運営しているマクギネス氏が公開募集し、組織した隊に参加しました。募集要項には、「このエリアの山は、2010 年以降に初めて入域が許可され、Indian Mountaineering Foundation（以下、「IMF」という。）／ Leh Office で登山許可が取得できるようになった」とありました。外国の登山隊の登山申請でなく、地元 Leh の旅行社による申請で、何らかの便宜があり登山許可が可能になったと考えました。

(2) 査証については、PH 社によれば、2012 年のこの隊に参加するためにインドの Mountaineering Visa（X）（以下、「登山ビザ（X）」という。）は必要なく、Tourist Visa（T）（以下、「観光ビザ（T）」という。）で入域／入山できるとのことでした。期間中 2 箇所でパスポートチェックを受けましたが、問題は生じませんでした。

(3) マクギネス氏に登山後に聞いた話では、IMF ／ Leh Office と PH 社間で年間契約があり、登山許可が取得し易くなったとのことでした。

(4) 2005 年の崑崙の未踏峰／ユメムスターク登山の時、或いは 2007 年の崑崙山行で、北京やウルムチでなく、カシュガルの登山協会で各種の許可証を取得できたことも頭にあり、Leh で取得できる規則・細則・あるいは運用があるのだと理解しました。

2.【2012 年に取得した登山許可書】

(1) 2012 年の登山許可書は、PH 社が IMF ／ Leh Office から 3 件（3 通）取得し、私自身、出発当日の朝、自分の眼で見て確認しました。それぞれ 6000 m 台の高度が記載された登山許可書で、山名の記載はありません。概略の地図にこの付近という感じでマークがあったように記憶しています。コピー等は取ってないので、正確な高度は記憶にありません。

(2) 結果的に、登山隊は 6000 m 峰の 3 座に登っています。このエリアは、正確な地図が公開されていないので、どの山かを特定するのが難しいです。

(3) AACK Newsletter No.76 に掲載した記事（以下、「掲載文」という。）にも記述しましたが、ゴンマ峰の標高はある地図では 6300 m、ある地図では 6040 m でありその差が大きく異なり、掲載文では私達が測定した GPS 高度の 6138 m を採用しています。この様な訳で、登山許可書に書かれた高度を見ても、どの山なのかがすぐには判別できませんでした。

3.【私達の登山記録の公表】

(1) 登山記録は自身のホームページ（以下、「HP」という。）に掲載しましが、山岳雑誌などに投稿する積りはありませんでした。ところが、昨年 2015 年 12 月に発行された「インド・ヒマラヤ」（日本山岳会東海支部編）に私達の登頂の記録が掲載されたので、私達がトレースしたルートを記録として残そうと思い、HP から抜粋した記録・文章を AACK Newsletter に投稿しました。

(2) このような IMF ／ Leh Office 発行の登山許可書を得て行われる登山活動が他の山々でも行われていることが十分考えられるので、「IMF ／ Delhi（本部）から登山許可を得て登頂に成功したものの、既にケルンが積まれていた。」という事態が発生する可能性が多分にあります。このことを知っていただくことも、今回、AACK Newsletter に掲載をお願いした理由の一つです。

4.【文言の訂正・・・初登頂→登頂（1 箇所）、未踏峰→山（4 箇所）、削除 1 箇所】

(1) 登山活動終了後の関係機関への報告は、マクギネス隊長に一任されており、私自身その後のフォローを行なう事もなく、登頂証明書もありません。よって、「初登頂」の「初」を削除し「登頂」に訂正します。

(2) また、このラダック山脈のエリアは「入域／入山許可されたばかりで未踏峰」との触れ込みであったし、登頂に際しても人が登った形跡・痕跡がなく、皆そのように思い込みました。しかしながら、山自体は 6000 m 峰ではあるが易

しい山であり、アプローチさえできれば特別な技術を必要とせずに登れる山であり、過去に人が登っている可能性を否定できません。よって、「未踏」か「未踏でないか」を確認できないので、「未踏峰」を削除して「山」とします。思い込みの強すぎた記述であったと反省しています。

掲載文を、『登山許可書を持って、ラダック山脈のある6000 m峰3座に登ってきた。』という事実を記述した文章に訂正させていただきたいと考えます。自分勝手な先入観念のため、掲載文の訂正に至ったことを深くお詫び致します。

(3) 訂正内容（自身のホームページを含めて訂正します。）

1)「標題」の「初登頂」を「登頂」に、「The First Ascent」を「Climbs」に訂正

2)「未踏峰」を「山」に訂正（「1. 概要」の3ヶ所と「3.1 ゴンマ峰登頂」の1ヶ所）

3)「3.2 ヨグマ・ラを越える」の「未踏峰だろうが、」を削除

5.【登山許可書、査証について】

2012年の私達登山隊の場合は、IMF／Leh Officeの登山許可書及び観光ビザ（T）で可能となる地元旅行社の募集する登山隊であったと考えています。しかし、結果として、インドが公式に示している規則に違反した登山となったことは深く反省しております。

2016年現在の課題として、IMF／Leh Officeでの登山許可書及び観光ビザ（T）の登山がどこまで可能であるかが、地図上で我々に明確に伝わってこない点が挙げられます。

例えば、2016年の今年の夏に、ある日本の旅行社の募集する「ツオ・モリリ湖周辺のある6000 m峰登頂」プランがありますが、これも旅行社からの説明では、観光ビザ（T）で可能な登頂プランとのことです。このプランを「無許可違法登山」と言う人がいるとすれば、公開募集に応じる一般の登山者は困惑する状況に立ち至ります。許可要件については、インド国において規定されるのは当然であり、具体的には当該地方行政当局等の規定・判断に基づく事柄ではないかと思います。その上で、旅行社の企画募集書に反映されているものと考えられます。企画募集書の内容が「違法」という事態は避けていただきたい。

6.【結　び】

2012年に行なった私達の登山をまとめると以下のようになります。

私が参加した隊は、IMF／Leh Officeが発行した登山許可書を所持し、6000 m峰3座に登頂しました。また、査証について、「今回の6000 m級の山々を対象とした山行では、登山ビザ（X）を必要とせず」とのPH社（会社はLehに存在する）の言うとおり、道中の検問も問題無く通過し、山行を無事終了しました。

しかし、結果として、インドが公式に示している規則に違反した登山となったことはたいへん残念なことであり、深く反省しております。

今後も、このような国際公募隊がLehにおいて編成され、ラダックにおいて活動する可能性は大きいと考えられます。私たちの登山のような事態を引き起こさないため、登山許可書を発行するであろうIMF／Leh Officeは、IMF／Delhi（本部）と緊密に連絡を取り、ラダック地域の登山許可行政の透明性の確保に努めていただきたい。

この度は、インドの公式登山規則に違反した事及び掲載文の訂正に至った事に関して、ご関係の皆様方には大変ご迷惑をおかけし、誠に申し訳ありませんでした。

AACK Newsletter No.76に掲載されて以降、厳しいご批判とは別に、複数の方々からご指摘を頂戴し、今回の「訂正」に反映させていただきました。感謝を申し上げます。

会員動向

訃報

梅田敏郎（2016年3月10日ご逝去）

吹田啓一郎（平成28年6月5日ご逝去）

名誉会員

山極壽一
京都大学総長

新入会員

青木俊輔

京都大学理学部学生

秋本克規

京都大学経済学部学生

井ノ上綾音

京都大学農学部学生

河合清定

京都大学農学研究科院生

川口康平

京都大学工学部学生

川畑天馬

京都大学理学部学生

小林詩月

京都大学農学部学生

酒井英人

京都大学文学部学生

櫻井　仁

京都大学農学部学生

谷川達紀

京都大学理学部学生

原　宏輔

京都大学大学院理学研究科院生

外園喜大

宮本明徳

京都大学農学部学生

六車光貴

京都大学工学部学生

山下　耕

京都大学総合人間学部学生

会員異動

編集後記

今回は編集作業に時間がかかり、発行がたいへん遅れてしまいました。そのため次回雲南懇話会の予告が､開催に間に合わなくなりました。読者の皆様、原稿をお寄せいただいた方々、雲南懇話会関係の方々にお詫び申し上げます。

今年から「山の日」が国民の祝日となりました（8 月 11 日）。そこに至る道筋の中で大きな意味を持つマナスル初登頂から今年は 60 周年にあたります。松沢会長と榊原さんから、AACK との深い関係を示す記事をいただきました。

原さんにお願いし、ますます人気の高まる笹ヶ峰音楽祭の経緯などを紹介していただきました。芳賀さんの著書の紹介は、お付き合いの深い平井さんにお願いしました。雲南懇話会もますます盛況のようです。

76 号の栗本さんの記事については、多くの方からご意見をいただきありがとうございました。本文に書いたとおり、この反省を今後に活かしていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。　横山宏太郎

次号原稿締め切り　2016 年 7 月 23 日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日　2016 年 6 月 30 日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松沢哲郎
発行所　〒 606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究 2 号館 4 階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町 1-8
㈱土倉事務所